

女性の家 HELP

ネットワーク ニュース
Network News

2018/11/15
No.

84

聖句

「恐れるな、わたしはあなたを贖（あがな）う。
あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。
水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。
大河の中を通っても、あなたは押し流されない。」

イザヤ書 43 章 1-2 節

「ここにいたい・・・」

「できることなら少しでも長くここにいたいです。」利用者の方がおっしゃる。女性の家HELPが緊急一時のシェルターで滞在期間も最長2週間(場合によっては延長もあるが)と定めていることを、支援員も利用者も充分承知している。

「お料理が本当に美味しい」。HELPは、朝食、昼食、夕食を、7人の調理担当者達が管理栄養士の資格を持つ主任調理師を中心に一日一人づつが交代で、施設内のキッチンで作っている。一汁四菜と聞くと驚く人もいるが、週末に入所して週明けに退所する人もいるこの施設は、好き嫌いを直すような所ではない。

少しでも好きなものが出ると嬉しいだろうとの配慮から、フードバンクやUBS証券等から送られてくる品も用いて、心を込めて、その日利用されている方の数に応じて調理している。乳幼児もいるし、高齢者もいる。国籍も言語も文化的背景も様々。矯風会はキリスト教を基盤としているが、利用者の宗教は限定していないから、イスラム教徒に向けたハラールフード(教えに従って食べることを許された食材)のみという人もいる。各自のお皿に盛りつけて提供するのではなく、大皿から皆で取り分けていただく。食欲は一人一人違うのでおかわりは自由。

「支援員の方の笑顔がうれしい」との声もよく聞く。医療機関への同行や、買い物への付き添い。一人一人に今何が必要かを、公的機関の福祉担当者と緊密に連絡をとっている。朝の連絡会、夕方の宿直者への引継ぎ会は重要だ。体調や薬のこと、翌日の予定…。日誌が書かれ、申し送り事項がファイルに整えられていく。そうした日常業務の合間合間にかかってくる電話相談。日本語、英語、タガログ語で対応しているが、深刻なDV被害の相談もあれば、とにかく誰かに聞いてほしい人間関係の悩みもある。つなぐべき女性福祉や法的な窓口を紹介して受話器を置く。

支援員達は主任を中心に良くチームワークが取れていると新入りの施設長には思えるが、苦労も多いことだろう。これから先のHELPを背負っていく支援員、宿直者の人材確保が今一番の課題だ。

1986年、日本キリスト教婦人矯風会の100周年記念事業として始まった女性の家HELP。30年を超える歴史の中から女性福祉の在り方をしっかりと学びつつ、時代の要請にあった適切な支援をできるシェルターを目指したい。カナダ合同教会はじめ、各地の教会、キリスト教主義学校、矯風会の「女性と子どもの人権と福祉」への願いと活動に賛同してくださる一般の方々や団体、そして北海道から沖縄まで日本各地で今日も祈ってくださる矯風会員の方々…。女性の家HELPの生活はそうした支えのお蔭で成り立っている。

松井 弘子 (HELP 施設長)

